原木シイタケ栽培

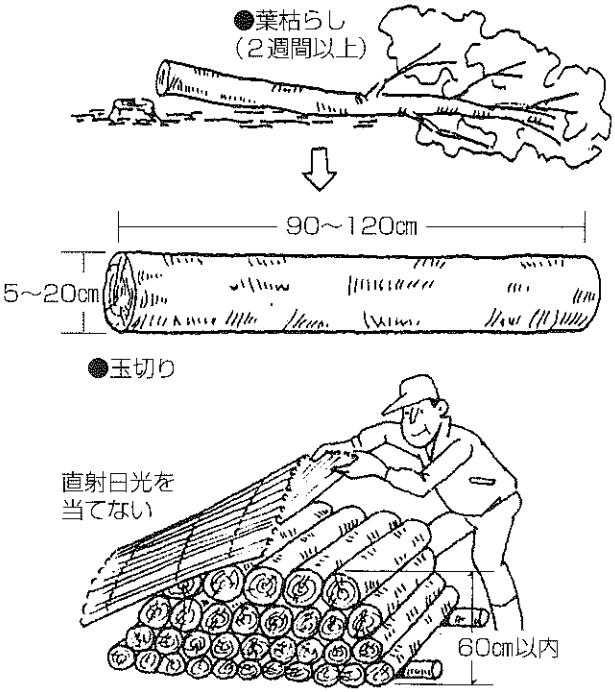
財団法人　日本きのこセンター

原木栽培の流れと発生パターン

	原木				1年ほだ木																2年ほだ木												3年	
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
ほだ木育成		原木伐採～玉切																																
			植菌																															
				仮り伏せ																														
									本伏せ																									
自然発生	形成菌：植菌1年目の秋から発生														発生1年目													発生2年目						
	種駒：植菌2年目の秋から本格発生																										発生1年目							

1．原　木

原木の伐採

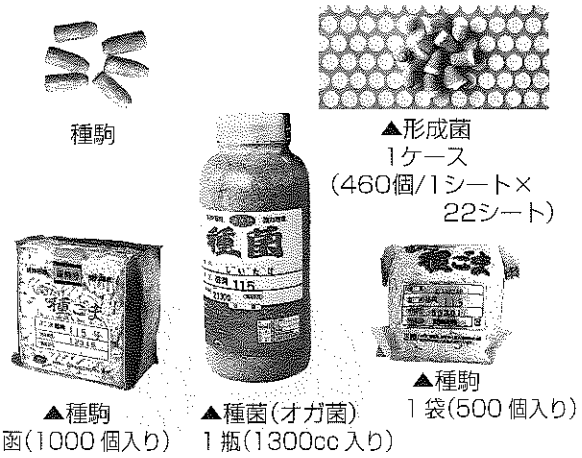


樹種　最も適した樹種はクヌギ、コナラ、ミズナラである。その他アベマキ、ナラガシワ、シデなど。カシ、シイ類も利用できる。

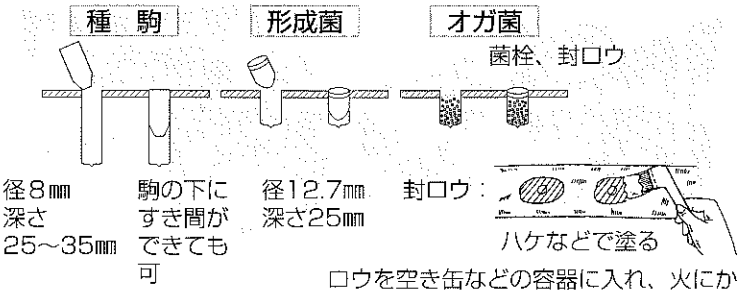
伐採　落葉広葉樹の伐採時期は、秋の黄葉初期から春の新芽が出るまで。カシ類やシイ類は厳寒期の1月から2月が適期。いずれも、樹液の流動が停止した休眠期が伐採適期である。

伐採後の管理　伐採後は、葉がついた状態で1ヶ月ほど乾燥（葉枯らし）させ、水分を抜く。乾燥が不十分であると、樹皮下組織が生きており、シイタケ菌糸の成長が抑えられる。その後、約1mの長さに切断し、植菌場所に運んでおく。植菌するまでの間に直射日光を当てないように、笠木や遮光ネットなどで庇陰しておく。

2．種菌の種類



種菌には種駒、形成菌、オガ菌の3種類がありそれぞれ植え方が異なる。



ロウを空き缶などの容器に入れ、火にかけて溶かす。白い煙が出るまで加熱したらはけやスポンジに含ませ菌の上から塗る。加熱し過ぎると発火するので注意。

3．品　種

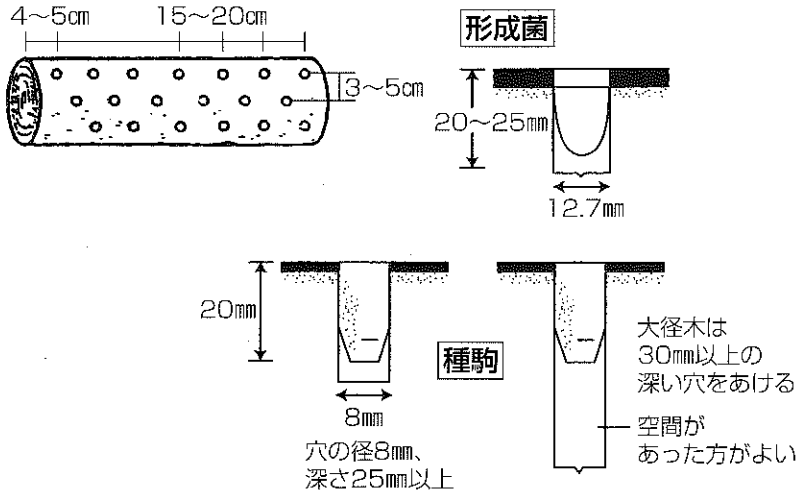
シイタケは品種開発が進んでおり、多くの品種がある。発生温度によって低温性、中温性、高温性などに分けられる。一般的には秋から春まで自然発生しやすい低中温性（中低温性）あるいは中温性品種を選ぶのが無難である。

夏季に浸水操作して発生させる高温性品種もあるが、これは自然発生しないので注意する。

主な品種と特徴

品種	発生時期	特徴
115号（低中温性）	春・秋発生	肉厚のジャンボ品種として有名。形成菌は1年目から発生しやすい。
324号（中温性）	秋～春	最低気温14℃位に下がってきたら発生する。初年の走り子が多い。
327号（中温性）	秋～春	最低気温14℃位に下がってきたら発生する。
240号（中低温性）	晩秋～春	最低気温11℃位に下がってきたら発生する。

4．植　菌



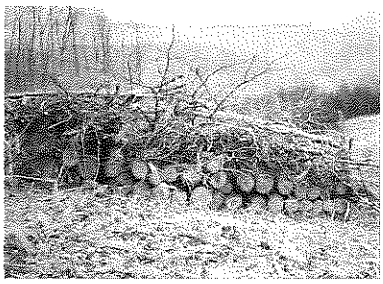
植菌時期　2～4月、梅の花が咲く頃からサクラの咲く頃が適期。

種駒　直径8.0mmの穴をあけ、金づちで種菌の頭が樹皮面より出ないように打ち込む

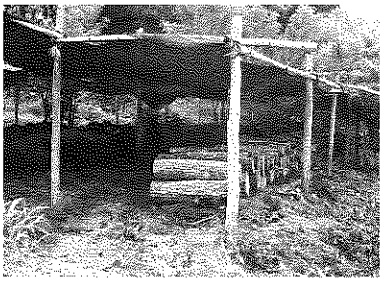
形成菌　オガ屑菌を駒形に形成した種菌で、上部にふたが付着している。種駒と同じように穴をあけ、指で押し込む。穴の径は12.7mm

5．仮伏せ

林内の仮伏せ



裸地の仮伏せ（笠木で日覆）

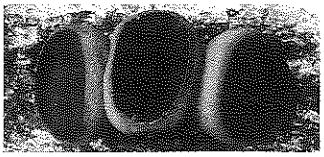


人工庇陰下の仮伏せ

木口の菌糸紋
これが出る頃本伏せする

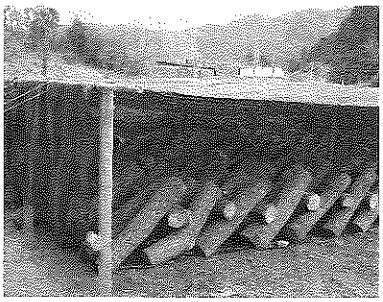
＜仮伏せ＞

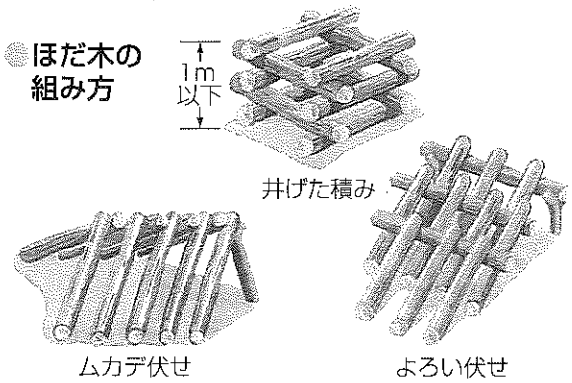
植菌したら、菌糸の活着をはかるために、ほだ木を棒積み（横積み）しておく。場所は日当たりの良い林の中が適。裸地や庭先など乾く場所ではコモ、ムシロ、枝葉などをかけて保湿をする。乾くところでは、週に2回ほど散水する。期間は、植菌してから2～3ヶ月間。4月以降は林の中など日陰に移動する。木口の菌糸紋、ゴムタケが発生してきたら本伏せする。



ゴムタケ
普通に発生するきのこで問題ない

6．本伏せ

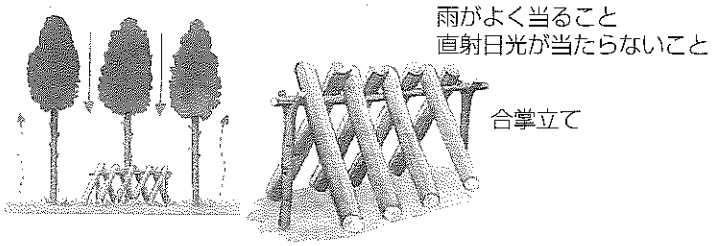


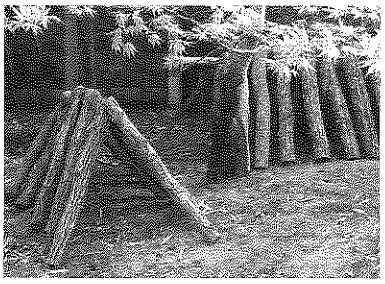


場所に応じて組み方を変える。各ほだ木に雨が当り風が通るようにする。

＜本伏せ＞
種駒は、駒の頭が白く発菌したころ、形成菌は、木口に菌糸紋が出現するころを目安にヨロイ伏せなどに組み替える。
伏せ込み場として望ましい環境は、春から秋まで直射日光が当たらず、十分に雨が当り、かつ通風が適度にあり、排水の良い場所。庭の木陰なども利用できるが、直射日光が当たらないように注意する。庇陰が不十分なときは、遮光ネットやヨシズなどをほだ木の上に張る。梅雨から夏期は、雑草や低木を仮払い、通風をよくする。
9月ころにほだ木の天地返しや積み替えを行い、菌糸を均一に成長させる。

7．ほだ起し～きのこ発生





きのこが採りやすいように、ほだ木が重ならない程度に立てる。

シイタケの呼び名
秋子　寒子　春子
日和子　雨子
どんこ　こうしん

季節と天気できのこの姿は様々に変わる。

〈ほだ起し～きのこ発生〉
ほだ木内に菌糸が十分蔓延すると、外樹皮下にきのこの原基が形成される。そのほだ木が水分を吸収し、低温刺激（品種の特性にあった温度）を受けたときに、きのこが発生する。
ほだ場　きのこが発生しやすく成長しやすい場所を選ぶ。雨が良く当り、乾燥し過ぎない場所を選ぶ。杉林、雑木林など強風の当たらない場所が適する。庭木の下の場合は、直射日光が当たらないことが大切。
管理　9月～10月は、きのこの基（原基）が出来る時期。積極的に散水する。
発生　中温性品種は夜間の最低気温が15℃以下の日が続く頃発生が始まる。秋から春まで断続的に発生する。冬期は低温、乾燥で成長が止まるが、春は成長が早い。採り遅れないように採取する。

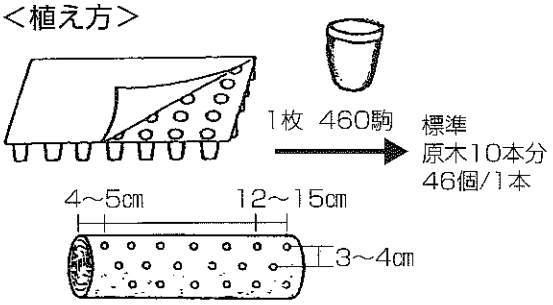
8．シーズン後の管理

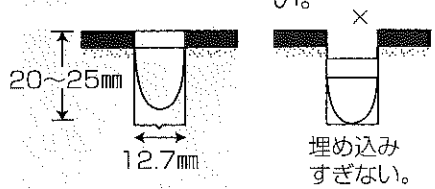
春4月まで発生するので、採り残さないように採取する。シーズン後は、直射日光が当たらないことを確認し、雨が良く当たる夏涼しい林内で夏越しさせる。

115号形成菌の植え方と栽培方法

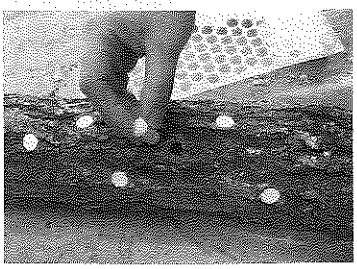
形成菌は、オガ屑菌を駒形に加工し、発泡スチロールのフタを付けたもの。
植菌した年の晩秋からきのこが発生しやすい。

＜植え方＞





・穴の径12.7mm、深さ25mm
・種菌の下の空間が空きすぎないようにする

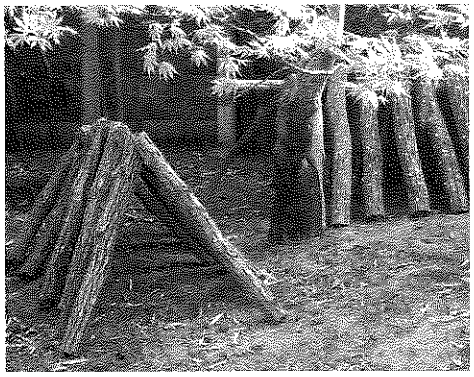


＜種菌の扱い＞

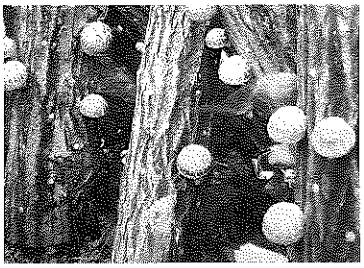
種菌は乾きやすいので、植菌する前はもちろん植菌した後も乾かさないように保湿する。

寒冷期はシートで覆う

乾く場所では散水する



日陰で雨が当るように



低温・乾燥時期にビニールシートやポリ袋をかけするとジャンボきのこが採れる。

＜植菌後の管理＞

○12月～2月（寒冷期）：暖かい場所で植菌したらその日のうちに青シートや黒ネットで覆う。3月以降は林内や日陰地に移動する。

○3月以降：林内や日陰地でネットなど通気性ある資材で覆い、一週間に1～2回の割で散水する。

点検　時々内部の湿り具合をチェックする。
結露や湿り気が少しあれば良いが、乾いている場合には、軽く散水してから包む。日差しが強いところは高温に注意。

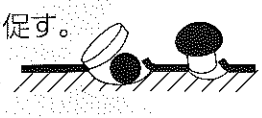
＜伏せ込み＞　日陰が大切

4月には、木の下など日陰のある場所に移動する。
建物や塀の壁、庭木に立て掛けてもよい。
直射日光は厳禁。日が射すところは遮光ネットなどで日陰を作る。雨が当たらないとダメ。
庭先では散水をこまめに行う。

＜きのこ発生＞　水分と湿り気が大切

発生前　夏から秋にかけては水分が必要。多めに散水する。10月には、風当りの弱い、乾きすぎない場所で、きのこが採りやすいようにほだ木を立てる。

芽切り　日最低気温が8℃以下になる頃から芽切が始まる。散水して、芽切りを促す。



成長　低温、乾燥が続くと枯死する。ビニールで覆って温室状態にし、成長促進する。

＜シーズンオフの管理＞

日陰で雨が良く当たる場所で夏越しさせる。
夏～秋にかけてこまめに散水する。

栽培のご相談は（財）日本きのこセンターまで